

岐阜まつりと道三まつりについて

○岐阜まつりは、岐阜市民の氏神である伊奈波神社や金神社をはじめ、市内各所の神社が毎年春に行う[例祭]にあやかり、市民もまつりを楽しもうと始まったのが『岐阜まつり』の由来で、昭和中期頃までは、岐阜まつり当日は市内の隅々までまつり一色に塗りつぶされ、市内の各町内では、大人も子供もこぞって神輿を担いだり、各家庭ではご馳走をつくり親族を招くなどしてお祝いをしたものです。

伊奈波神社をはじめとする多くの岐阜市内の神社は、毎年4月4日、5日に「例祭」を開催しています。また、伊奈波神社などの神賑わい行事である[神幸祭(しんこうさい)]、[宵宮(よみや)]は、毎年4月の第一土曜日に開催されています。

神幸祭は、御発幸(ごはっこう)の式事後、神輿を中心に、獅子・猿田彦・社名旗・五色旗などが、正装した神官たちの行列に守られながら、金神社・檀森神社・北野神社・赤口神社を華やかに巡幸します。

宵宮は、満開の夜桜と提灯の灯りがともる伊奈波神社参道に、近郊の町内から曳かれた山車4台(市重要有形民俗文化財指定の[踊車(おどりしゃ)][蛭子車(ひるこしゃ・えびすしゃ)][安宅車(あたかしゃ)][清影車(せいえいしゃ)]が列をなし、山車の上ではカラクリが披露され、また、繰り出された本神輿の奉納や仕掛け花火の打ち上げ等もあり、参拝者と花見客で境内が多くの見物客で埋まります。なお、昭和初期までは、20数台の山車が伊奈波神社参道に列をなし、たいそう賑わったそうです。

○道三まつりは、昭和48年にNHK大河ドラマ[国盗り物語]が放映されました。これは、京都にいた一介の油売り商人が、美濃を訪れるうちに土岐氏に仕え次第に頭角をあらわし、やがては美濃を領する戦国大名にのぼりつめた風雲児・斎藤道三を題材にしたもので、道三は単に戦国武将として歴史の表舞台に登場しただけでなく、城下井の口(岐阜)を次の時代にふさわしい形の都市づくり等に貢献した人物であったことから全国的に大きなブームが起こり、その史跡を求めて多くの観光客が岐阜を訪れました。

テレビ放映を契機に、全国の人達に岐阜の町や岐阜の人の心意気をより知ってもらおうという気運が高まり、この年の4月に岐阜まつりに協賛する形で、歩行者天国・市民茶会・楽市楽座市などの行事が中心市街地で行われたのが『道三まつり』の始まりです。今日では岐阜に春を告げるまつりとして多くの市民に親しまれています。